The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	パーマカルチャーにおけるデザイナーと地域住民の協働
Author(s)	橋本, かれん
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2025, 11, p. 61-64
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102724
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

パーマカルチャーにおけるデザイナーと地域住民の協働

美学　博士前期課程２年
橋本　かれん

はじめに

本発表では、パーマカルチャー（Permaculture）の実践において重要な役割を果たすデザイナーに注目し、デザイナーと地域住民の間に協働という関係性が見られることを明らかにする。最後に、パーマカルチャーにおけるデザイナーの役割が周辺環境を自ら作り上げることから、多様な要素の間に立ち計画を支え、推進することへと変化したことを示す。

パーマカルチャーとは、持続可能な農業と暮らしを目的として、1970 年代前半にオーストラリアで生まれたデザイン分野だ。自然の仕組みに学びながら、人間の生活空間をデザインしていくパーマカルチャーは、環境問題やエネルギー危機といった現代の課題に応えるかたちで、その内容を変化させながら世界中に広がった。特に 2005 年になるとパーマカルチャーは、コミュニティ単位で持続可能な社会経済システムをつくろうとする社会運動、トランジション運動へと拡張していく。

本発表では、パーマカルチャーにおけるデザイナーの役割について、特に 2006 年以降の動きに焦点をあてて論じ、デザイナーと地域住民の協働という関係性を明らかにする。まず初めに、パーマカルチャーの展開とそれに伴うデザイナーの役割の変化を時系列に沿って整理する。続いて、トランジション運動の成立の背景とその内容を明らかにする。最後に、イギリスのトットネスにおけるトランジション運動を具体例に挙げ、パーマカルチャーにおけるデザイナーと地域住民の協働の在り方とデザイナーの役割について考察する。

パーマカルチャーの成立と展開

本章では、パーマカルチャーの変遷を成立期、拡大期、展開期の３つの時代に分けて整理するとともに、各時代におけるデザイナーの役割について明らかにする。

パーマカルチャー とは、人間の持続可能な農業と暮らしを実践するためのデザインであり、オーストラリアの生物学者、環境心理学者であるビル・モリソンと、彼の教え子であるデビッド・ホルムグレンにより 1970 年代後半に提唱された。パーマカルチャーという語そのものは、永久的な（permanent）と農業(agriculture)、文化(culture)の２つの語を基にした造語である。その内容は、土地の特性に合わせて人間の住居や動植物を適切に配置していくデザインであり、実践においては定められた３

つの倫理と 12 の原則が考慮される[1]。

成立期（1970 年代後半）においてパーマカルチャーは、環境にやさしく持続可能な暮らしを実現する理想的な手法としてオーストラリア国民から注目を受けた。一方で、当時そのデザインが実践された事例は創始者２人の実験的なものに限られ、一般に実践、継続された事例は見られていない。当時のパーマカルチャーは、実践の指針となる３つの倫理と 12 の原則などは確立されておらず、創始者２人が、生態学や農業の知識を用いて実践するものであった[2]。成立期のパーマカルチャーにおけるデザイナーは、場の設計者としての側面が強く、専門的な知識を活かしながら環境を設計する役割を果たしていた。

拡大期（1980 年～）においてパーマカルチャーは、実践的なデザインとして多くの人々に認識され、実践されるようになる。創始者による継続的な書籍の出版や普及活動により、オーストラリア国内にはパーマカルチャーに関する団体が多数結成された。これらの普及活動と同時に、実践において基準となる３つの倫理と 12 の原則が定められていく。この倫理と原則では、環境のデザインに直結する内容だけでなく、他者に対する関わり方も言及される。拡大期においてデザイナーは、個人で環境のデザインを行うだけでなく、パーマカルチャーを人々に広める教育の役割も担うようになる。

展開期（2006 年～）においてパーマカルチャーは、地域社会を対象とした社会運動の理念としてより多面的に認識されるようになる。2006 年、パーマカルチャーの講師を務めていたロブ・ホプキンスがイギリスのトットネスで始めたトランジション運動は、地域再生の取り組みとしてパーマカルチャーの原則を用い、コミュニティ単位で持続可能な社会経済システムをつくろうとするものである。トランジション運動においてデザイナーは、農業から地域経済に至るまで多様な分野における問題を住民と話し合い、その解決に向けて行動する。展開期においてデザイナーは、持続可能な地域社会を作るという目標に向けて、地域住民同士のつなぎ役として運動を推し進める役割を担うようになる。

トランジション運動

本章では、トランジション運動が成立した背景とその内容を示すともに、その理念や原則においてデザイナーに求められる役割について明らかにする。トランジション運動とは、地域コミュニティ単位で行われる運動であり、石油依存や気候変動といった現代社会が直面する課題に向き合い、地域全体で持続可能な生活を再構築すること

---

[1] パーマカルチャーにおける３つの倫理は、その実践における道徳的信条として常に意識される。３つの倫理は、次の通り。１．地球に対する配慮 ２．人々に対する配慮 ３．余った時間と金とエネルギーを、１、２の目的の達成に貢献できるように使う。ビル・モリソン他『パーマカルチャー－農的暮らしの永久デザイン』田口恒夫他訳（農山漁村文化協会、1993 年） ９頁。

[2] Bill Mollison, David Holmgren, *Permaculture 1: A Perennial Agriculture for Human Settlements* (Transworld Publishers, 1978).

を目指すものである。実際には、石油ピークへの関心を高めるイベントを開催したり、地域通貨を導入したり、住民のリスキリングの機会を設けたりする。

トランジション運動の正式な成立は2006年9月にトットネスで開かれたイベント「公式アンリーシング（Official Unleashing)」に象徴されるが、その萌芽は前年の2005年からすでに見られていた。アイルランドのキンセールでパーマカルチャーの講師を務めていたロブ・ホプキンスは、2004年9月にグレゴリー・グリーンによるドキュメンタリー作品『郊外生活の終焉』(2004）を講義の一環で視聴する。さらに同日に、ピークオイル研究連盟のコリン・キャンベルを招きトークイベントを開催した。この出来事は、生徒だけでなくホプキンス自身にも大きな影響を与え、石油が枯渇していく未来に対する危機感を強く認識するようになる[3]。この流れの中でホプキンスは、彼が受け持つコースの２年生が取り組むプロジェクトを、「キンセールの街を未来の低エネルギー社会に適応した街へと変化させる方法を模索すること」と指定する。このプロジェクトでは、諸問題に対する地域住民の意識を高める上映会や、テーマごとに意見を出し合うワークショップなどが積極的に開かれた。しかし、プロジェクトの主要メンバーである学生の活動が１年で終わってしまうことや、ホプキンス自身もキンセールの住民ではないことなどが原因となり、プロジェクトを地域に根差した活動として継続させ、成長させていくことが困難であった。このようなキンセールでの反省を生かし、ホプキンスがイギリスのトットネスで始めた活動がトランジション運動である。

ホプキンスによる書籍『トランジション・ハンドブックー地域レジリエンスで脱石油社会へ』[4]には、トランジション運動の活動の前提や原則などが示されている。その中でホプキンスは、トランジション運動の目的を、コミュニティが自らの答えを探求し、見出すためのきっかけとして機能することと定義している[5]。つまり、活動を率いるデザイナーは、地域にあらかじめ完成された答えを与える存在ではなく、住民自身が課題を認識し、未来像を描き、協働して取り組むための触媒（catalyst）としての役割を担うことになる。

協働の在り方とデザイナーの役割ートットネスの事例から

トットネスは、イギリスのデヴォン州にある人口約9000人[6]の街だ。2005年10月、この小さな地方都市で始まったトランジション運動は、やがて世界に広がる大き

---

[3] Rob Hopkins, *The Transition Handbook: From Oil Dependency to Local Resilience* (Chelsea Green Publishing, 2008), 122-123.
[4] 同書。
[5] 同書、135頁。ここにおける「きっかけ」という言葉には、直訳すると触媒（catalyst）という言葉が使用されている。
[6] 2021年３月時点。「City Population」URL：https://www.citypopulation.de/en/uk/southwestengland/devon/E63006907__totnes/（最終閲覧日：2025年８月20日)。

な潮流の出発点となった。運動の中心にいたのはパーマカルチャーの実践者であったロブ・ホプキンスだが、その推進力となったのは専門家の知識だけではなく、地域住民が主体的に参加する協働の仕組みであった。本章では、トットネスにおける協働の在り方と、その過程でデザイナーが担った役割について考察する。

トットネスの運動では、はじめに、気候変動や石油依存に対して地域がどう備えるか、という大きな問題意識が共有された。その上で、活動は小さなイベントやワークショップの形で展開された。例えば、映画上映や公開講座を通じて住民の関心を喚起し、その後にテーマごとの分科会やオープンスペース形式の対話[7]が設けられた。これらの場は、単なる情報提供にとどまらず、住民が互いの意見を表明し合い、互いの経験を持ち寄る協働のプラットフォームとして機能した。ここで重要になるのは、デザイナーが一方的に答えを提示するのではなく、場そのものをデザインし、参加者が対話しやすい環境を整える役割を果たした点である。

また、トットネスでは「トットネス・ポンド」と呼ばれる地域通貨の導入など独自のプロジェクトが多数展開された。これらは専門的知識を必要とする一方で、地域住民の信頼や協力なくしては成り立たない試みである。デザイナーの役割は、このような実践においても、物事の間に立ち調整しながら物事を進めることとして現れる。デザイナーは、複数の立場を持つ住民、行政、企業の間に橋をかけ、対話を通じて地域全体の目標を描き出す役割を果たしている。

むすびに

パーマカルチャーは、その広がりや時代の変化に合わせて多様な側面を併せ持つようになった。この変化を詳しくみることで、同時にそこにおけるデザイナーの役割の変化も浮き彫りになった。特に、トットネスにおけるトランジション運動は、地域社会の課題に対して住民が自ら取り組むことを可能にする協働の場を重視し活動をした。その実現には、外から与えられる完成されたデザインや計画ではなく、住民とともに課題を共有し合い、学び合い、試行錯誤を重ねるデザイナーの姿勢が不可欠であったことがわかる。このような実践は、持続可能な社会を形づくるうえで、デザイナーが住民との協働を通して、調整役として機能する重要性を示しているだろう。

[7]トランジション運動において、人々が集まって議論をするときに用いられる形式で、人々が円状に座って行われる。その際には次の４点が重視される。①誰もが参加できる。②そこで起きたことはすべて起きるべくして起きたことである。③物事は、それが始まるべきときに始まる。④物事は、終わるべき時に終わる。注３、168 頁。